

成福寺の山門と宗高院

成福寺の山門は四脚門です。その門の特徴は、主な柱（主柱）二本とその前後に二本ずつ計四本の支えの柱（控柱）がある形で、鎌倉の寺では一番多い門だそうです。その構造によって五つに分類され、成福寺の四脚門は、主柱が屋根の棟まであり控柱はその三分の二の高さで茅葺き、切妻の屋根を支え、主柱と一緒に前後の控柱の上部と中間を真横に角材が貫き、主柱の上部と控柱の上を海老のように湾曲した梁でつないだ、棟柱・海老虹梁式と呼ばれる様式だそうです。全体的には禅宗風ですが、幾つか部分的に柔らかな感じになるよう仕上げられています。また棟木の下に格子がありますが、四脚門では例が少ないそうです。

江戸時代の初めの頃、山崎村の領主で宗高院という奥平氏の娘が屏風などとともに山門を成福寺に寄付したことや、その山門があった宗高院の館跡が山崎の南西の方に残っていて、その南の山腹にある桜の木を村人は御墓山の桜と呼びそれを宗高院の墳墓の目印にしていると、昔は石碑もあったと江戸時代後期に編集された新編相模国風土記稿に書かれています。しかし、今は館跡も桜も残っていません。残っているのは、山崎集会所の脇道の奥にあるお塔さまと呼ばれ祀られている五輪塔です。これが宗高院の墓ではないかと言われています。